いきいきと暮らせる地域社会をめざして

ともに生きる

第17号

平成29年1月31日

発行：京都市南部障害者地域自立支援協議会　デザイン・制作：福祉工房P&P キャッチアップ

「相模原障害者殺傷事件」について思う事

NPO 法人ハーモニーきょうと　吉田信吾

「ノーマライゼーション」、「インクルージョン」、あるいは「地域包括」とか「地域移行」とか･･･

昨年７月26日、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で十九名の入所者が虐殺され数十名の方々が重傷を負わされた。犠牲となった方々には哀悼の意を改めて表明したい。

私たちは、日々在宅支援の仕事をしている。色々な条件があって入所せざるを得なくなる状況があったとしても、地域で馴染みの人間関係の中で生活することが基本であると言っている。「ノーマライゼーション」とか「インクルージョン」とか、この国の基本方針もそういうことになっている。けれども、殺傷された人々は遠いところにいた。殺されてもなお、個人として追悼されることもない（実名すら明らかにされることのない）存在として。このことをきちんと肝に銘じたい。

加害者のこと

加害者は「障害者はいなくなればいい」と思い凶行に及んだ。自分自身の考えを文章化し、殺傷の対象を重度の障害当事者に限定している。思想的確信を持つ大量殺人者である。

しかし、精神障害の可能性が言われ、精神障害者への管理強化が言われている。事件を契機とした精神障害者への管理強化、差別弾圧を許してはならない。

加害者は私たちと同業者であった。施設の中で日々障害者の支援を行っていた人だ。彼がなぜこういう行動に至ったのか、他人事でなくとらえる必要があると思う。

ナチス・ドイツは、障害者を社会に「無用」であり生きる価値なしと見なした。「戦争は不治の病人を抹殺する絶好の機会である」とのアドルフ・ヒトラーの提言を受け、「T4 計画」「安楽死プログラム」と呼ばれた施策の遂行によって 20 万人の障害者を殺害した。ホロコーストと呼ばれるヨーロッパのユダヤ人の大虐殺の前のことである。

曽野綾子という人がいる。元東京都知事であった石原慎太郎という人がいる。二人とも著名な物書きである。加害者と同様な発言を幾度となく繰り返している。現職閣僚である麻生太郎（財務大臣）、稲田朋美（防衛大臣）もナチスを賛美する言動を行っている。社会保障関連経費削減を言いながら、在沖縄米軍基地への支援を惜しむことのない安倍政権は確実に戦争（＝障害者抹殺）への道を進んでいる。街頭では特定の人を名指しで「殺せ！」というデモが頻発している。

思想はある日突然生じてくるわけではない。社会的諸関係の中からジワジワと人々の心に沁みこんでくる。加害者の言動はこうした文脈の中にある。私たちもこうした空気の中にいる。意識して抵抗しなければならない。

誰もが「あたりまえの」生活を実現できるように！

「われわれソーシャルワーカーは、すべての人が人間としての尊厳を有し、価値ある存在であり、平等であることを深く認識する。われわれは平和を擁護し、人権と社会正義の原理に則り、サービス利用者本位の質の高い福祉サービスの開発と提供に努めることによって、社会福祉の推進とサービス利用者の自己実現をめざす専門職であることを言明する（中略）。

『ソーシャルワーカーの倫理綱領
（社会福祉専門職団体協議会）前文』」

事件のあった施設は巨額の資金が投入され建て替えられ、現在、自宅や代替の場所で暮らしている被害者たちの多くが入所する方向で議論が進んでいる。なぜ再び入所なのだろうか？しかも恐怖の記憶の残るその場所での暮らしを強いられるのだろうか？

好きな場所に住んで、好きな仲間と苦楽を共にするというあたりまえの生活の実現をめざし続けることこそが、私たち福祉職の仕事なのであることを確認したい。

INFORMATION

開　催　日　時	内　　容	場　　所
２月13日（月）　10:00～	「児童部会」	伏見区総合庁舎４Ｆ中会議室
２月15日（水）　14:00～	「災害対策部会」調整会議	伏見社会福祉総合センター２Ｆ会議室
２月16日（木）　10:00～	「精神部会」事例検討会	伏見区総合庁舎４Ｆ中会議室
３月７日（火）　15:30～	地域懇談会	伏見区総合庁舎１Ｆ多目的ホール
３月10日（金）　10:00～	運営会議	深草総合庁舎４Ｆ第1会議室

施設紹介

サポートセンター夢小路

伏見区桃山町山ノ下44-1　TEL&FAX (075)601-1753
ホームページ　http://www.kyoto-place.com

＜サポートセンター夢小路＞は「私達にお手伝いをさせて下さい」をモットーに沢山の個人・法人様の支援を受けて平成28年2月に放課後等デイサービスと児童発達支援の多機能型で立ち上がった事業所です。

子供達は地域の学校に通う小・中学生が大半です。開所当初、どのようにすれば子供達が笑顔で幸せを感じてくれるのか手探りな所もありましたが、子供本来の姿である元気に身体を動かす事をメインに児童指導員による体操やダンス、外遊びで思いっきり走り回る等の取り組をして来ました。

少しずつ子供達も増えて来るに当たりプログラムもパソコン/iPad教室、ソーシャルマナートレーニングを取り入れました。

また専門職の方と提携をさせて頂き、臨床美術を取組み、色々な作品創りに挑戦しています。1月からは書道教室、2月から理科実験教室のプログラムもスタートします。春から秋に掛けての外遊びは足育「はだか靴下」の導入をします。今現在は手話教室を導入出来ないか協議中です。子供達の可能性が広がり一人一人の人生にかかわるお手伝いがしたいという思いでスタッフ一同支援・指導をさせて頂いております。

社会福祉法人 世光福祉会

デイ・アクティー　イマジン（生活介護20名）
サポートステーション　ゆに（相談支援　居宅介護）
ショートステイ　ゆに（短期入所）

伏見区桃山町泰長老179−1
TEL (075)634-8123　FAX (075)634−8143

障がい者地域共生拠点「イマジン」オープン

みなさんご存じでしょうか？国道２４号線を御香宮交差点から南に1つ目の信号の先、伏見簡易裁判所の北側に新しい建物が出来ました。ここが社会福祉法人世光福祉会「障がい者地域共生拠点イマジン」です。

世光福祉会はベテスダの家を向島で運営してきましたが、２つめの拠点として新施設をはじめます。ベテスダの家は定員超過でしたが、２施設体制になることで支援学校の卒業生も年度毎に受け入れることが可能になりました。

また看板には「障がい者地域共生拠点」と記されています。この名称は制度上にはありませんが、障がいのある方と共に地域の様々な方たちとつながっていけることを願ってのものです。これまで重度の知的障がい・自閉症といわれる方への個別支援、そのご家族への支援を続けてきた経験から、イマジンが少しでもお役に立てればと思います。

今後の予定としては、スロープ付きのお風呂がありますので多くの方に、介助者と共に利用していただけるよう準備をすすめていきます。どのようなことが必要か一緒に考えていきたいと願っていますので、どうぞお問い合わせ下さい。

災害要支援者に関する専門部会

京都市伏見区社会福祉協議会　山本 麻由

9月28日に伏見区役所で第3回の災害対策部会を実施し、25名のご参加をいただきました。伏見保健センター、愛隣デイサービスセンターからそれぞれ熊本地震における支援の報告、区役所総務防災担当から伏見区で想定される災害に関する情報提供をしていただきました。その後、6月に実施したアンケートをもとにグループワークをおこない、事業所での災害対策における現状や課題を話し合ってもらいました。グループワークを通して、「何から手をつけたらよいかわからない」「必要性は感じているものの取り組めていない」という声のほか、「それぞれの事業所がおこなっている取り組みの情報共有がしたい」という意見が出されました。災害対策に関する取り組みの内容も事業所によってさまざまで、具体的に避難計画を立てているところもあれば、まったく手つかずのところもあるなど、事業所間でも大きな差があることがあらためてわかりました。

このような現状をふまえ、現在は次の部会に向けて調整会議を重ねているところです。具体的には、部会全体で取り組むものとして「わたしの避難計画」の作成を検討しています。これは、災害時に要配慮者が避難するにあたって必要な内容（支援者、避難方法、避難場所、避難ルートなど）を含む計画です。また、一人ひとりの状況に応じた計画を立てるためには、事業所からご本人・ご家族等への災害時支援に関するアンケートも必要になると思いますので、今後の部会で取り上げていきたいと考えています。

10月から12月にかけては各学区での防災訓練が多く実施されました。ご参加いただけましたでしょうか。部会の中でも「地域とのつながりや普段からの付き合いが大切」という意見が出ていました。訓練への参加は地域とのつながりをつくるきっかけとなりますので、是非活用してください。

今後も関係機関と連携しながら、災害対策について各事業所でどのようなことであれば取り組んでいけるか、みなさんとともに考えていけるような部会になればと思っています。各会議の中でいただいたご意見も参考にしながら進めていきますので、大勢の方のご参加をお待ちしております。

精神科病院からの地域移行を考える

京都府立洛南病院　中川　千晶

精神部会では、今年度も引き続き「精神科病院からの地域移行を考える」をテーマに、宇治おうばく病院・醍醐病院・当院の 3 病院の病院見学会及び意見交換会が行われました。

当院には当初の予定より多い 29 名の方に来院いただき、病院のあゆみや特徴を簡単に説明させていただいた後、3 班に分かれて救急病棟や開放病棟・デイケア・外来等を見学していただきました。当院や精神科病院は初めての方も多数おられ、随時質問や感想をいただきながら現状を見て知っていただきました。院内を全て見学していただくことはできませんでしたが、他病棟にも興味が沸いた等の感想もいただきました。

見学後は居宅介護等事業所・通所系事業所・地域生活支援センター・当院より取り組みの紹介を行いました。当院からは長期入院者の方を対象に、多職種スタッフが関わり取り組んでいる退院促進プログラム「地域生活探検隊」を紹介させていただきました。何十年と長期入院になっている方は地域で生活するというイメージを持つことが難しい方も多く、まずは動機付け、イメージ作りや不安軽減、地域生活に向けた課題への気づき等を持つために、一緒にスーパー等への外出、電車の利用、施設見学、簡単な調理、実施後の振り返り等を行っているプログラムです。地域の事業所の方々がなかなか関わることのない長期入院者の状況・病院内の取り組みを聞いていただくことができ、また各事業所の状況を教えていただくこともでき、貴重な機会となりました。取り組み紹介からは当院多職種スタッフ 16 名も加わり、その後は 6 班に分かれて意見交換会を行い、実際のケースで困っていること、病院や事業所各々に聞きたいこと等、班毎に活発な意見交換がなされました。参加者からは、普段関わる機会の少ない事業所職員と看護師等が直接意見交換できたことが特に良かったという感想を多くいただきました。

今回で 3 回目を迎える意見交換会ですが、回を重ねるごとに内容も充実してきていると感じています。病院も地域の機関の 1 つです。地域で生活されている当事者の方や、これから地域での生活に取り組もうとしている長期入院者の方々を、共に支えていくことができるような連携の輪を少しずつ広げ、充実させていけるよう引き続き取り組んでいきたいと思っています。

支援学校の進路決定に向けて

京都教育大学附属特別支援学校　西尾　朋子

前回の進路部会では、通学・通所に課題のある生徒に対する送迎支援のあり方と、不登校の状態にある生徒への支援に関する事例報告を受け、グループ内の各事業所や学校が経験してきたことやそれぞれの立場での考えをお互いに聞きあいました。

送迎については、深刻な問題だと思います。

本校は京阪墨染駅を東に約１８分、ＪＲ藤森駅から１２分ほど歩いたところにあります。現在、京都市内在住の生徒および向日市や長岡京市などの京都市周辺地域在住の生徒が通っております。

小学部はスクールバスを利用しますが、中学部になると自主通学を目指します。しかし、中には自主通学が難しく、中学部から高等部卒業までの６年間を保護者の送迎のもとに通う生徒もいます。自主通学ができるようになっても、場や人へのこだわりが出てきたりして、大人がつく必要が出てくる場合もあります。

通学途中の生徒を見ていると、学校が好きなんだなあと思います。学校に行きたいという気持ちがあって、本人なりの楽しみや目的があるからこそ、家を出て保護者と離れ、一人で学校に向かえるのではないかと思います。そう考えると、学校は生徒が来て当たり前ではなく、生徒が行きたい、行ってあれをするんだ、と思えるところであるべきではないかと思います。人との間にやりがいを見つけ、自分を活かせる場所が学校にあることが必要なのではないのでしょうか。

たしかに自主通学ができ、公共交通機関が利用できると、進路選択の幅は広がります。でもそれだけではなく、卒業後の進路先でも、自ら楽しみややりがいを見つけ、あてにされる自分を感じられる生徒に育てることも学校の大きな役割かと思います。

関係機関の皆様には日々お世話になっております。進路部会でいろいろな思いを聞かせていただくことが、私にとって非常に勉強になっております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

児童に関する専門部会

京都市児童療育センターきらきら園　川西　智子

児童部会では、12月12日に第27回となる意見交換会を実施しました。「地域連携（相談支援）」をテーマに、伏見子ども支援センターより、その役割と要保護児童対策地域協議会の取り組みについて大変わかりやすく説明して頂き、理解を深めると共に子ども支援センターには仕組みとして関係機関等との連携がとれるシステムが出来ており、参考に出来るところが沢山ちりばめられていました。

また、障がい者地域生活支援センター「あいりん」から児童の計画相談･連携について、事前アンケートの集計結果をもとに児童支援利用計画作成等の流れと現状説明や問題提起がされた後に、グループに分かれての討議を行いました。グループごとに、各事業所における連携でうまくいっている取り組みや、難しさを感じている点などをケースの事例をあげたりしながら「支援学校と放課後デイの連携が取りやすくなった。普通級や育成級に通うケースは連携が取りづらい」「児童館と放課後デイの役割は異なるがその利用の仕方について保護者の就労と子どもの育ちとの支援の板ばさみで悩ましい」「不登校ケースの場合の連携の難しさ」など活発な意見交換がなされました。事業所間で個人差はあるものの、連携が必要なケースをそれぞれが抱えていて動きも実際に始まっていることが伺えました。

最後に「なぜ連携が必要なのか？子どもが育つためにはいろいろな力が必要なのにプチプチ途切れてしまう･･･連携のニーズを感じないところに連携は生まれない。子どもが目の前で過ごす時だけでなく、その子の人生を保護者と共に語り合いながら進めていくことが大切。」という高木先生（洛西愛育園）の言葉で部会が締めくくられました。その言葉に共感された参加者の方も多かったと思います。ライフステージごとに支援の連携を途切れさせることなく、次のライフステージで支援する関係機関にどううまくバトンタッチしていけるのかも、私達は問われているのだと感じました。

地域連携において“顔の見える関係”が重要であることは言うまでもありません。

「放課後等デイサービスの連絡協議会のような組織ができるといい」という声も今回多く聞かれました。部会を通して、皆の思いが形になっていくよう今後に期待を膨らませつつ、互いに顔の見える関係でつながり「連携」が取りやすくなっていくと良いと思います。